

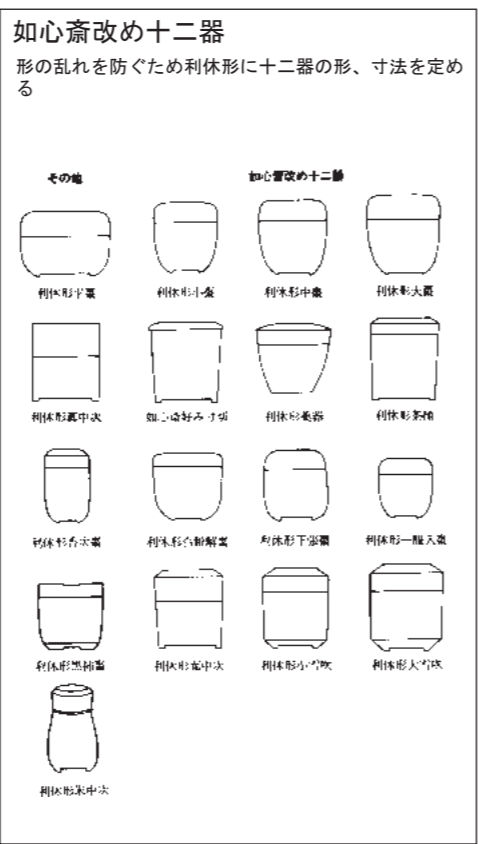
和歴	794 平安	1192 鎌倉	南北朝 1338 1392	室町	1467 戦国	安土桃山 1574	1603 江戸
中国歴	北宋 960	南宋 1127	元 1260	明 1368	明15~16C	明17C~	

わび茶												
武士の茶の湯												

君台観左右帳記 『小壺なつめ』の形を、茶桶合口の塗茶器としたのが『棗』となる

武野紹鷗 棗を始めて好みを用いる紹鷗の好んだ七つの茶器 頭切 磁器 帽子 磁器 棗籠 (中次) 棗 (甲が平)

千利休 利休の好みの茶器 棗 (小、中、大、平、鷲) 中次 面中次 (面取) 雪吹 (小、大) 尻張



武野紹鷗形 大・小の棗を基に形、寸法が定まる 蓋が深く、切合口で古風

千利休形 棗 大・中・小 一服入棗 濃茶一服 最も小さい 雪吹 大・小 唐茶桶の上下面取りがあり古風 面中次・茶桶 上の角だけ面取り合口が真ん中は面中次、上部は茶桶 薬器 肩の張った切合口仕上げ 下張 などで肩を下ふくらむ 白粉解しうおとき 化粧箱の白粉香合の形 後に平棗となる 鷲棗わし 最初の好み盛阿弥作小棗 菊棗・桐棗 大・小 正親町おおきまち帝へ献茶の おり進献した菊棗大、桐棗中を二種二双としたもの

盛阿弥形 利休の塗師で秀吉から『天下第一』の号を受けた名工 利休形大より一回り大型



織部形 溜塗茶桶 木地溜塗 (春慶塗)

宗旦形 溜塗中次・松木中棗 木地溜塗の佗好み 詩中次 詩を墨書き 木地溜塗

仙叟形 大棗・薬器 大棗は蓋の甲中央をへこませ周囲もくぼみ「河太郎」と呼ばれる 薬器も甲をくぼませる 基筒こけ・茶合棗ちやこう 薬器茶をはかる合や基石の容器の変わり形

原叟形 棗 大・小 甲が一文字で古風 菊桐雪吹大 菊桐を小さく甲に蒔絵

如心齋形 つぼつとは焼塩を作る素焼きの器で音をたてて遊ぶ 愛らしい器を図案化